

生きた証と奇跡

長生村立長生中学校 三年 高橋 來聖

今年の六月。歴史の授業で戦争を学んだ。そのときふと、曾祖父のことが気になり、父に尋ねた。

「お父さん、おじいちゃんってどんな人。」

「え、戦争で死んじゃったから知らないよ。」

「え、マジ。」

「うん、遺書もあるよ。」

すごく驚いた。曾祖父がこの世に生きていた証が残っている。ものすごくその遺書を見たいと思った。

ちょうどすぐ後に法事があり、父の実家に行くことになった。父の姉である伯母にそのことを聞いてみると、

「見る？少しカビ臭いけど。」

と、木でできた箱を渡してくれた。開いてみると、茶色っぽい薄い紙が四枚と、写真が一枚入っていた。字が消えかけていて少し読みづらかったが、父も一緒に読んでくれ、少しずつ内容が理解できてきた。そこに書かれていたのは、そのとき曾祖父が置かれていた状況と、家族に向けての感謝の言葉だった。

「子供達をよろしく頼む。」という文字の横には、涙の跡と思われる小さなシミがあった。僕は、遺書を丁寧にたたみ、木でできた箱の中に入れ、仏壇の下にしまった。

僕には、曾祖父がどんな思いでこの遺書を書いたのか、痛いほど伝わってきた。大切な家族を遺して、この世を去らなければならなかった曾祖父は、どれだけ無念だったろうか。祖父が成長する姿や、曾祖母とともに、晩年まで楽しく過ごす未来を思い浮かべ、涙を流しながらこの手紙を書いたのだろうか。

なぜこのように優しく良い人が、命を落とさなければならなかったのか。戦争がなければ、失われることのなかった命。家族を悲しませてまで「死にたい」と思っていた人が何人いただろう。

第二次世界大戦中。何千という日本人パイロットが、死を覚悟で飛行機ごと敵に突っ込んでいく特別攻撃隊に志願したという。当時十七歳だった数少ない生存者はインタビューの中で、

「本当は怖かった。死にたくなかった。戦争で命を落とした兵士たち。子や孫として生まれていたかもしれない命もたくさんあっただろう。だから、自分には生きる義務がある。」と語っていた。戦争により多くの命の連鎖が絶たれてしまった。僕は、曾祖父の命を奇跡的に受け継ぎ、生まれてくることができた。自分にも同じ義務があるのかもしれないと感じた。

このまま人々の記憶が薄れていってしまうのではないかと感じた僕は、自分の考えをまとめた作文を書き、クラスで発表をした。発表が終わると、「話を聞いていて、泣きそうになった。」と先生やクラスメイトからたくさん声をかけられた。少しでも、曾祖父の思いを知ってもらえたことが嬉しかった。

もう戦争の悲惨さや命の尊さを伝える曾祖父はこの世にはいない。曾祖父のことを知っている祖父も既に亡くなっている。曾祖父の本当の気持ちはもちろんわからない。しかし、遺された遺書から感じとった家族への思いや「生きたい」という気持ちをできるだけ多くの人に伝えたいと強く思った。

この世の中には生きたくても生きられなかった人がいる。災害、事故、病気、事件。人の命が絶たれるニュースを耳にするたび、僕は胸が苦しくなる。大切なモノがいつ奪われるかわからない世の中。少なくとも今、僕の話聞いてくれた人達だけでも、命を無駄にしたり、傷つけたり、人から大切なモノを奪ったりすることがないことを心から願っている。